

陥落^はつて珠をす水は爺の胸のあたりに亂れ散つた。

伏見の使は滞りなくすましまして、大層稱賛されました。それから、二ヶ月許り経つて、わたしは國へ歸るやうにありまして、その時、月照さまは黄金拾兩、わたくしに下さいました。その黄金でこの馬を買ふて、この水車場を建て、今につまらぬ年月を送つて居ります、……若い時、あゝ若い時は面白い事が御座りまさア——ね。

聞けば彼れには尙、優しい美はしい物語があるのであらう。けれども彼はこれから里へ行かねばならぬ。この物語りに春の面白い時をすごした自分は、白梅が咲き亂れてある我家の背戸口へと急ぐのである。

いつしか自分は脊戸口に立つた。何心なく振りかへつて水車場の方を見ると、かの新河に沿ふて砂烟が上つた途端、轆轤たる車聲は極めて和やか春の野に起つた。車の音がゆるんで砂烟が消えたと思ふと、言ひ得ぬ悲壯を調子で唄ひ出した追分節それは作爺である。

風が戸たゞきやア——うつゝで醒める

ほんに恥かしいわが風姿^{すがた}

あゝ、水車の廻る音と、この追分節が麥の風に送られて來る間は、方十里のこの平野には平和が宿るであらう。

虹よ沙彌よ

木村 仙蓼

かしこ御そらに、今七色の彩^{あざ}うるはしう、虹かゞれり。わが湖國の名山伊吹と、奇しき物語の主^なある、りやうせんを、左右の橋詰として、掲焉たる自然の文、げに心うばはるゝ哉。

春雨しめやかある、樓のおばしまに倚り、我庭の面、はた、近きわたりの家々ある、紅梅白梅、うす紅梅の、はげしく薫する、亂れ香に包まれて、今しがた、うすら寒ければ、風もや引かんと、わがうはぎ、はおらせで、かへしやりけん友の沙彌と、二人して、はふらしつる書や繪や、近刊の雑誌などを取取めんとせで、ひたすらその友の上に、思ひを馳せつる折柄、あはれ美妙のこの神わざ。灰色おせる雲のおもて、またくひまに、もえたつ七色のだんだら染めの、長さ幾里に現じたるぞ、げに崇高のかがめ、無限の力のしるしかる。雨の日は常より早く、やがて一時経おば、黄昏れあんを、いともものしづかにて、うたゝ寐に耽りける下里は、いまあはたゞしゆう夢よりさめたる如かり。さても友のしやみは、かへるさ、何處に佇みて、このたぐひあき、活けるたくみをや眺め入るらん。いつもわれにうち語るごと、かのけはしき、切通しの坂を登りつめ、息のあへぎをしづめんとて、やすらふ程どこを覺ゆれば、一本松の根方にや、星の眸の虹にまじろがざめれ。そのやうだい、艶にゆかしう、かたへよりは、谷間の百合の凝れる所どこぞ、見ゆべかむめれ。このくしきわざにふれて、彼の清き、情ある胸にひそむ小琴の絃の、かりいでたらんいみじき調べは、やがてあざやけき墨痕に、長き文となりて、わがにぶき瞳を、眩めかすあるべければぞ、二人坐を同うして、この天景をめでざりける悔あらじや。

懷ふ、冬のある夕、われ、病やうゝ重りて、市聲のかしましきをさけ、佐久良といふに里居して、静養する友を見舞ひてしかへさ、同じその里に、姉君と叔母君のゐますを、今朝しも、たまさかに訪れ來て、たそがれ、出で、芹川堤をさまよひ、姉君に用ありとて、町に行き給ひけん後に、たゞ獨り残れりし、沙彌の

君と、はしく奇縁によりて、言の葉をかはしつ。かくて、兩岸に立ちあらぶ枯木の梢を、ふるはすばかりの風もあき、冬には稀なる良宵あれど、所がらとて、ゆきかう人は絶えてなく、犬の影さへ無けれども、彼方に黒ずむ藪のあかには、きつね狸の影はあるべき、たゞすまひのもるか、板橋の上に手をとりつゝ、下ゆく水に二人の物語りを托して、湖心に秘めしよりぞ、友とはあれるかりける。おゝその夜、星殊に美はしかりき。友の沙彌は、まだうら若うして、些の汚れのくもりあき、眞たまの子、平和のまもり永久にかたかれ。美神は、われ等をして、あれしめ給はず、虹ははや中絶えて、しだいに其影うすれゆきぬ。のたくる野路に馬をこめて、たちつくしたりけむ馬子は、追分の聲ゆるやかに歩みをうつし、御堂のきざしに、立ち並びたりけむ子守女の唄、再び前裁の目白をや驚かすめれ。

雀三つ、かあたの柿の梢高く、雲の帳の綻びより、洩れ出る日かげを受けて、囀りつゝはぶく。その左、梅樹を包むらん一簇の藪ありて、おぼつかあき、ホーホケキヨの聲をかよはす。葉末のしづく、そがために、かまかにゆらめいて、地に消えむはあはれあらずや。うすもやは、その柿も藪も、はた、彼方の古城の天守閣、野末の古寺のあららぎ、山の麓の落葉樹林、あざ見わたすかぎり、物みかをつゝみて、おぼくしきはひ。

時に、虹またさか映ゆ、さきと所を同うして。

にび色の無縫の衣のおもてに、七色の綬、落る日影と、ともにかゝやくは、げに幽玄と威嚴のよそはひあらずや。誰れか仰いで、靈智の光明、さらに新らしきを得ざるべき、あゝあべての人の、ひとしく羸ち得べき大らかのたまものか。

友のしやみ、こたびは堂の椽近く、すえたたる經机に身をもたせて、その身入れる顔には、いつしか無心の

ほろろみの、浮べるあるべし。かいま見たしや。

おもへらく、この樓の午后は、冥竈深うして、幸ある哉と。魂合へる友と相會ふを得つるのみか、天の榮えのはちやかあるきわみを、靜かに仰いで、我顔に、その餘光を浴ぶる事、二たびあるを得つること。

かくて、嘆美にあふるゝ我胸には、歌もかあはず、あこがれつるひまに、虹落ち、虚空の雨雲ちぎれ飛び、薄雲、黄雲、青雲、みだれ小紋の天の衣。

あはれなき兄

第五年級 那須 開神

としつきのうつりゆくまゝに、ありしことどもを、思ひいづれば嬉しき悲しきさまのふし、おほかるうちに、せうこのうせにしかあしき云はんすべせんすべ知らずとおぼゆる、そのほごのことかきつゞけんは、いと胸いたうしのびがたければ、くはしうもえしるさず、たゞかあしみのあまり、そのあらましを、かゝまほしくてこそにもものすることしぬ、あはれこをよまん人よ、わが心をくみ給へかし、

この世は定めあきかりの宿とおもへど、げにたのもしげあきものかあと、あほしも愚癡をあん、こぼさるゝ、あはれあき君よ、こひしき兄上よ、おのれ古郷にかへりしとき、いそぎ兄君の病の床に、おどづれしに御身はおどろくばかりやせさらばひて、すでに今はとからせ給へるときわが心よ、實に腸をさく思ひありき、あゝあはれわが兄は、遂にその日の夕つ方かへらぬ旅にたび立ちて、のべにたつ煙るときぬうせ給ひぬうからやからあつまりて、あげきかあしめども何のかひかある、あゝあはれわが兄のあきがらは、いまはしくもはや灰とあり給ひぬ、このさびしきのべに、たちのぼれる煙の、いとはかあげに空にたあびけるは、わが

ためのかたみあるか、この齒は快げに笑ひ給ひしときの齒あるか、この手は、この足は、あぞ思へばいど、かかしさやるせなく胸に針さす如くにかん、まいてあね君は、いみじう、まめやかに、かしづき給ひければ、おのれはよそにありて片時もあぐさめ、いたはるよしあかりき、あうれたきかも哀しきかも、

あはれわがかぞいろは老いさらばひ給ひて、家のことにも、かゝつらふはいとものうしとて、わが兄君にはやく家つぎせせんとし給ひければ、兄君はもの學びの心おさへがたけれど、せんかたあくついに父上のをしへにしたがひ給ひ、せめてはわがみをとて、おのれに力をこめ給ひしぞ、ありがたきうはみある、かれその恩にもむくい、かつはいさゝかにても、たすけ奉らんと、いみじうはげみしかど、學びの道のいまだ半にも進まず、まして兄上をたすけ進らすべき身にも至らざるに兄上は早くも失せ給ひき、あうあぢきあの世の中やあうれたきかも哀しきかも、

さるあいだ兄君のおくつきまうでんと、はう君、あね君、あどうからやからもろともに、兄君のありし世のことあど語りつくゆきけるに、のべにしはあく虫の聲も、いふせき四阿屋にやすむおきあの、きせるをたう音も何とあうあはれを、もよほすげにかあしといふも愚かり

もろともに兄のあはれをかたれとや

おくつきちかくからすあくらむ

あはれ／＼この石こそ兄君のしるしの石か、よべざけべど、寂としてこたへ給ふことあし、やがて、つゝしみて兄君のおくつきの御前に、しきみどかいふ木の一枝をたむけ、香の木一ひらを焼て、うかねつきぬきをろがみて、まうさく、あはれ兄上や飛鳥川のふちせさだめぬがごと、うつろひかはるふは、この世のさがあるものゝ、かくもはやく石とかり給ひしとは、あう思ひ回せば、君は學びの道をあくまで、たどりたき御

心かりしかど、親のゆるし給はず、いたづらに家のためにかられて、せんすべあかりければ、つひにひとり學びと心きめ給ひしが、いまだ千が一もしとぐることあくしてはかなくあの世の人とかり給ひしは、あうかかしききはみ、不幸のいたり何ともいひえずあむ、頭をあぐれば虫の音いやたかく、夕日の光りいやひくゝ草木はいど色あかりきかし、どきにいろはの君遙にかすむをちの山を、のぞみていひ給はく、あうわがうせし子や、もしかの山の中にかくれをるあらば、おのれよろづ世かけてもさがしみてんど、あはれこの一言親の子にたいする愛情の、さばかりとこそ思ひやられて、いとあかしけれ、あううれたきかも哀しきかも

あはれその夜はよもすがら、つゆまごころまで兄君のことをのみにえがきつゝありけるに、突然わが名を呼び給ひければ、こはいかにと頭をもたぐるに、ゆめかうつゝかはたまほろしか、たゞありあけの光り寂然とあたりをてらすがみゆるのみ、かゝること兄君のうせしそのほごはど／＼毎夜にして、ねぞめすることこの不幸やゆめあらばいかにと、おほゆるぞいと愚かある、あううれたきかも哀しきかも、

さきてちるは花の常、月も満つれば必ずかく、あだし野の露、とりべ山のけぶりの如くきえうするは住みはてぬ世のさがとは、いひながら、げにあぢきあきありさまかあど、うちあげかるゝも亦凡俗の身の免れざることかりかし、仰いで四方を見渡せば、天地寂として音もあく色もあく、世はさながら闇夜の如くにかん、たゞおつるは涙のみぞあるある、あはれ／＼そのゆき給ひし日こそ、げに千世よろづよすすゑかけて、永き罔極のうらみあれ、あううれたきかも哀しきかも、

かくあどさきのわいだめあく、かうがへもあく、ものしたれば、もどよりかいやり、すつべきものあれどいさゝか後のかたみにもと思へばかん、

(完)

山住と春の桃林

第四年級 中 村 竹 坡

隙行く駒の足はやみ、其後月日は數多過ぎつるが、吾曾て山中の客となり、少時光陰を空しくせし事ありき昔謝安と云へる人が、東山に高臥せし跡を學ばんとてには非りしかど、我性偏に山住まひを愛づるものから、山又山の深嶺を越え、水又水の幽澗を過ぎ、奥の奥ある山中に、崔嵬を里とし麋鹿を友とせる、閑にして幽ある一僻村へと移りたるあり。村舎の數は凡十戸餘りありけるが、吾は別に家づくりせしにはあらで只舊知の人を頼とし來りたるにて、吾が假庵は二間にあまぬ陋屋ありけるが、其いふせきはいふせかりつれど、萱將た竹もて築きあせる、亦自ら風流ある風情ありて、誠に浮世の塵を外にして、別に天ある心地せり。

山中の住ひ無事にして、吾とこしあへに机に凭り、偏に文を友とす、暇あれば峰巒重疊せるも倦まず、溪谷深遠あるも辞せず、草鞋竹杖縦横に跋渉し、幽を探り奇を求め、依りて文の資とし、心を養ふを日毎の習とせり。

嗚呼そも人として風流の心無きは、恰も花に香あきが如しと、古人の云ひしも宜あるか。

折々の變遷につれて、山里の景色も様々あるぞ戀しき、雪の暮、月の曉には、かの「暮山の薪を拾ひては雪を戴くに膚寒く、幽谷に水を掬んでは月を擔ふに肩瘦せたり」を、いへる古事も思ひ出でぬ、

峭壁千仞削りあせるあたり、一條の瀑泉懸り、石に打ち石に打たれつ、宛然雪の花を散らす景色に對すれば夏の炎蒸も全く消え、幽邃雅致神悠然として仙境に遊ぶ感あらしむ、はた秋も漸く深みゆくまゝに、上の山も下の溪も、楓櫨錦の雲を織りこめて、龍田河瀬もこれには劣らめと、思はるゝ處、かの「林間燂酒燒紅葉」

の句か、將た杜子美が詩句を弄せんには、又壯嚴の思溢るあり、されど又桃林の春、花榮ゆる景色こそ、余が絶叫せんばかり、優美の極をつくし、限りなき慰藉を與へたるあれ。

黃鳥喬木に遷り、幽谷春水來りて後、早や頃は彌生の半ばも過ぎたりけん、山を圍み谷を繞る桃樹、今を盛に花開き、一目千本の様、彩雲一簇俄に岫を出でたるかと思ふたればかりに、春の霞をいろどりぬ。

風流を解するとはあらねど、村里に住むある翁媼も此心づくしの花盛には、林下に芳春の酒を汲むとかや思ひ出せば或る日の事ありき。かり住の机に凭り書を繙くに、疎簾半は夕陽を帯びたるに、心漸く倦みければ、いざ桃花春水暖かあるに輕舟を棹して、かの武陵溪上の春を尋ねるに習はんもと思ひたるに、生憎日の遲きを顧みて思ひ止め、さらばと簷下にありし竹杖とりて青鞋を穿ち高き路低き處恰も羊腸に髣髴たる間を辿り、知らず身は彩雲の裡にさまらひぬ。今、古、欄橋畔杖を停めて瞥見すれば、桃花夕日に映じて一しはの艶をかし、五彩の雲烟燃え立つかと思ふ、時しも遙か千重の雲を破りて、笛聲の響き來るを聞く、何處あるか、これはこれ誰人のすさびにやあらむと、一時心を彼方に傾けしが、圖らざりき、面白の牛飼人がかの馬手の方ある山間の路辿り、笛の響と諸共に、三つ四つの牧牛を追ひつゝ來る見ゆ、今一聲は高らかかりき。

古に聞く昌平の御世には牛を桃林の野に放つと。吾今其様まのあたり見る、青苔の上に坐しつらく、考ふるに、かけまくもかしこき今上の大御門、偏に世をしろしめて四方の海波靜かに吹く風枝を鳴さず、賤が伏屋も漁樵の人も、専ら天恩に沐浴すと感到りて涙そゞろに落つ、時しも溪間の寺より送るる鐘の聲に驚きて家路に辿り初めぬ十日あまりの月かの青峯に懸り影落ちて溪流にあり嗚呼そも清らかある眺めあるよ、

朧月夜

第四年級 金谷杏甫

冬ごもり春さりくれば、鳴かざりし鳥も來をき、咲かざりし花も咲き出て、尾上も麓もかすみ深うたち罩めて、梢にたづぬる鶯の聲もいそのごかに、一際こころの浮きたつものは春のけしきにこそ。

村のいさゝ流れは水かさやまさりけむ、岸ある水車の響く音たかし。

かゝたの山の端より、次第／＼に青草萌ゆる麓までうまぐろうありわたりぬ。空には一輪の月佐保姫のかすみの袖につままれてかゝれり。あゝ遊子はさびしき閨中、かぎりなき故國の情に涙ながし、鬼神を挫くものゝふも此月にむかひては、傾く山の端をかがめ、昔こひしきふる里の空をしのび、獨り露しげき袖をしぼるらむ。

さて我友はいかにこの月夜をくらし過すらむ。

あゝ月よ汝は世の中正に暗くからむとする時、山の端近くほのめきて、永遠の光、無限の靈を以て、花をてらし、人をてらし、山をてらし、川をてらま、何ぞ其の姿の清くどうぞくして、其の心のたひらかある、まいて今宵の如くかすみに包まれたるに至りては、其隱逸ある敬服のいたりからざるあし。

あゝ永遠あるは天地ある哉。あゝ永久變らざるは自然ある哉。人はいかあれば生死の巷にたちて、蝸牛角上に名利の刃をたゞかはし、情慾の快をむさぼり、人面をかりて内には鬼をやごし、形を天使に擬して内心惡魔を宿す。

さるを此清けき月の、雲のためにかくさるゝ事あるはいかに。こは月の清くして雲のけがれたるが故あり。

若し雲のけがれたる時、月もにぐりてあらばこはこれ月の月たる所にあらず。あゝ我れもし羽ありあば空たかくまひあがり、此俗塵万丈のうき世をはなれ、永遠なる天地自然を友として遊ばむものを、人間はげにおろかあるものあらずや。

折しも我門をほと／＼とうち叩き、よぶ者あり、たゞと答むれば、客其名をつぐ、聞けば日頃より親しくあそびし友垣あり。かれの曰く、こよひは常からぬよき夜あり、梅も咲き初めしと聞く、ともに一夜を遊ばむもたのしからむ、君いかにとくはれければ、われはげにさこそあらめと打ちうあづき、何所の里ぞえらばねど、梅花の月鏡にむかひ、容つくろひつゝあるをめでん爲め、共に柴の戸を立ち出でぬ。

東せんか、西へ行んか、西と東いづれもえらばねど目ざすは花多きほどり、月くまあき園あり。

いまだ園にもつかさるに、響きわたりしは初夜のかねか、初夜後夜、更くるはいとはじざれどそが心あき響に、花や散るらむ、月やかたむかむ、もし花散りこよひの景色を損じあば、恨むは我れのみか、月の悲しみはいかに、月傾きてこよひの影をかくしあば、をしむはわれのみか、容つくろう花の恨はいかに。吁此鐘此響、何所の僧のおこせしわざぞ。

あゝ月、あゝ花、いかに交りぞや、人のごときかたらずして言の神を他に通じ。人のごとき話さすしてそのまことを互にあらはす。此所に自然の價あり、こゝに永久の望あり。しかも榮枯盛衰時をおあじくし、機をともにして或はかあしむ、或は樂しむ。噫友と我れとのそれにもにたる哉。

我れらは川に沿ひ、歩み行くこと五六町、一の小さき園に達しぬ。遠きものは白雲の枝にかゝれるかどあや

しまれ、近きは水晶の玉をつらぬきたるが如く、老樹參差、希疎槎枿として猿の池にうかぶ月をとらへんとするが如きあり、幹くちて枝の端に二ひら三ひらの花を匂はせるあり、或は蜿蜒臥龍の如く、あるは蟠屈眠虎の如きあり、風一たび吹き來りてさゝつと梢にふるれば颼々として六花の空に舞へるが如く、片々として地上に落ち、あるは池の面にちりて一個の詩趣をのせて浮ぶ。あはれ此宵しばしかりとも砧の音をきくゝあばいかばかりの風情をまさむものを、あはれ心なき賤が屋の乙女や。余らの心は恍乎として恰も仙境に遊ぶの想あり、あゝこれ花中の仙源。

夜はしだいに更け行けど、興はいよく加はりぬ。友だちとまれば我も立ちどまり、我歩めば友も亦歩む。歩むもイむもはあれえぬは月と梅との交り、月の梅を慕ふてか、月の梅に戀ひてか、いづれにしてもわりなき交りと云ふべし。

時にわれあまりの渴にせまられければ、とある池のほとりに近くたちよりて水を掬へば、花瓣一ひら二ひら手の上に宿りぬ、我が思ひや妙にして又快。

噫梅ある哉、寒き冬をしのぎ、よろづの花に先んじ、美花を開きて諸花の美を壓し、薰香清高あるを以て群芳をしのぎ、天然の高格自らそかはれり。かるがゆゑに後鳥羽のみかごを始め奉り、菅公等の諸のひじりひとしく梅をめて、あやしの賤が男に至るまでめではやし、庭としてこを植ゑざるはあし、吁何らの幸ぞや、吾人青年鑑みざるべけむや。

❁ ❁ ❁ ❁ ❁ ❁ ❁ ❁ ❁

あゝ造化の巧のことに勝れたるは春の景色にやあらむ。われらの二人は野の神の手織りの芝生の上に腰うちかけ、しばしやすらひぬ、歸るべき心地もせざりしが、ふと傍ある友に促され、名残りつきずも、其園を共

に立ち去りぬ。

あゝ思へば月は長へに天地とともにかはりあし、されどわれらは實に死生の巷に立ち、興亡のわだちをめぐる。あゝ花よ汝はこん春を仰へ又花を開くべけれど、今年今日再び汝と見ゆること能はず。たれかこの時勢のかこみを脱し、悠遠ある天地自然と遊ぶことを得んや。

あゝ我らは悠遠を希へども、終にえがたき空想あるか。

❁ ❁ ❁ ❁ ❁ ❁ ❁ ❁

路にて友と別れわが家に歸りしころは、夜もいたくふけて空井はるかに飛ぶの聲きこえぬ。

われはその聲を今宵の最后としいそぎふしごに入る。結ぶ夢さへ芝生の上に遊びし事をぞ偲ばれて面白し。

ふる郷

第四年級 山本繁七

胡馬は北風に嘶き、越鳥は南枝に巢ふとか、鳥獸をほ且つ爾り、況んや人として、故郷を慕ひ懷はざるものあらんや。

思へば、出郷の際、故山の風色、平和ある家庭、慈愛深き母の爲めに、後髪曳かるゝ想したれども、青雲凌霄の氣、溢るゝが如き身には、さあがら風前の雲の如く、容易にこれを拂ひ、飄然故郷を辭して、此處に來りし以來、はや五星霜、あゝ月日は流るゝ如しと、眞ある哉。その時、父は百方言葉を盡して、我を留めんとし、母も亦老の眼に涙を浮べつゝ、浮世の海の狂瀾怒濤を語りて、わが企圖を轉せん事を願ひぬ、余は固より田園生活のいかに趣味多きかを悟らざるにあらず、自ら進んで、都會紛擾の裡に、投ずることの極め

て、愚かるを知らざるにあらず、されど、わが熱したる情火は、わが理想を焼きつくして、焰々として熄むかきを如何せん、げにわれは憤の子あり、悶の子あり予は實にこの田園にありて、煩悶不平の裡に、愁殺せらるゝを忍ぶこと能はざるが上に、浪風荒き海を越ゆれば、松瀬潮聲の樂しき渚もあらんと思へばどかくして僅に父母の許しを得遂に闊々たる海路の彼方、いと幽かある、一縷の光明を便りに、舵の絶えたる如き一葉の小船を、虎狼の勇を以て漕出せり、風吹かば吹け、浪立たば立ていざ進みて、五尺の微軀の斃るゝまでは、世の荒浪と戦はん。

かく誓ひつゝ、懐かしき青山、慕しき松原、ゆかしき清泉に、遅々として別れ去りしも、はや夢の心地ぞする。日和長閑あるまに、桃咲く小川に、花の枝を流して赤き或は白き花の行方を見送せし朝、又は隈あく澄める月影にあこがれて、里川の汀をたどり、笛とりいでゝ流水の曲を調べし夕もありき、若葉さす頃、友と共に語りて、蛙の聲に耳を傾け、あるは木枯吹きすさぶ頃、寒さも知らで、雪達摩をつくりしことあど、交々胸に浮び來りぬ。されど我は、最早昔の吾あらず、嗚呼思へばこも亦春の夜の夢の如し。

雨そぼふる晨、月暗き夕、我想は常に故郷に馳せて感慨限りあし。

嗚呼故郷！故郷はそも何が故にかくは慕しき、曰く人はまづ、己に近きものより愛す、郷土は、嘗に祖先の骨を埋めたる所のみにあらざるあり。さらば、父母の親しきためあるか、朋友の慕はしきためあるか、さあり我これをおいて、他に亦何かあらむ。

されど廣大無邊ある惠深き父君は、三年前不圖病魔に犯されて、もうくも、黄泉の客とあり給ひぬ。残れる吾は、恰も羽翼を失ひたる鳥の如し、その果敢あきこと、羽脆き蝶の溟渤の風に堪へずして、花もあく、香もあき枯草の中に、葬られたるにも類せずや、頼みあきのこ身は、親に捨てられたる小羊の、星影もあく、清

水もあき荒野にさまよひて、餓狼の餌とあるらん、それにも似たらすや。あゝ今宵庭の銀杏の上に懸れる、冬枯の月は、月變りかく、昔ながらの光をはちて、野寺の苔むす父君の御墓を照せりや。

故郷にありし時かつて窓を同うし、互に教へつ勵まされたる友と我、願くば、よしや年を異にして生れたれども日をば同うして死せん、樂は共にせざることも、苦を與にせん、存亡相助け、危急相救はん、かくて轡あらべて各々文の林に分け入り、光り輝く月桂冠に向ひて馬を進めばや、と誓ひし友、今は健在あるか。

あゝ、花の香匂ふ春の朝、月影清き秋の夕、覺えず故郷の面影忍ばれて、何度も歸郷せんと思ひしが、遠く海山隔て、學海に棹す身の、それも叶はで、たゞ吾が魂魄のみ、故山の樂園に遊びつゝあり。

あゝ止みあん、止みあん、我今故郷を慕ひ思ふとも、何の甲斐がある。

わが心の駒よ、曾て國を出づるとき……學卒へすは故土を踏まず……と堅く心に銘したるにあらずや。嗚呼愚かりけり嗚呼愚かりけり予はかゝる愚を再びせざらむことを勤めずして可からむや。

亡き父母

第三年級 徳 永 乾 堂

あはれ空蟬の世の中に、悲しきことは、濱の眞砂の数多けれど、死ぬてふこと程悲しきことはあらざるべしましてあつかしの父君に先立れしこそこのう悲しけれ、何事も業成り名遂げて歸る日を、指おり數へて待ちあむと、仰せられし言の葉も今はや仇とはかりぬ、人の命はあだし野の草の葉末の露とはいへ、かく果敢なくも散るものか、あゝつれあきは人の命、まゝあらぬは浮世ぞかし。

思ひ返せば去年の秋軒端にすだく虫の聲のいとたえだえあるに遠く近く聞ゆる笛の音は、何處の童のふきす

ざぶにや、折ふし音のう木枯に誘はれて、絶えつ、聞えつ、又絶えつ、門邊にしげき落葉の音、枕を音づれて、いと、物あはれに思ひつる頃、人のあげきも吾悲しみもよそにしてあはれ、あつかしの父君は遠寺の鐘の響、諸行無常を告ぐ頃返らぬ旅にいでましぬ。いとしの母に見捨てられ嘆きの涙かはかぬに、今また父君に先立たれ我らは荒波に揖をとられし捨小舟よる瀬かき身とありし。

忘れもせじ去年の昨日の夜ありけり、さやけき月は、物すぎきまでに庭の面に照り渡り、咲きみだれたる八重櫻をまばゆきばかり照し、様の、いと妙あるに日頃愛でさせ給ひけることゝて、父君は花見の宴をあさばやとて、昨日歸り給ひし兄上諸共、母上余等をもあひて、端ちかく立ち出て給ひ、月夜の更けゆくも知らで、互に問ひつ、語りつ、後の山に月の落ちかゝりしに驚きつ、とかくに臥床に入りぬ、かの夜の花見の席はいかに樂しかりしよ。

去年に咲きにし櫻木は、又かはりかく咲きつるに、あゝあつかしの父君はあどてや歸り給はぬぞ、月はくもれど雲去れば、又はがらかに照せるものを、あどてや母上は歸り給はぬよ、天に叫べど天いはす、地に訴ふも地答へず、只聞ゆるは、谷間を流る水の音と梢を傳ふ夜風のみ。

あゝいとしの父母のみ魂は、今頃はいつこにいますらむ、やよ父君のう母君よ、後のことゝもみ心にかけ給ひそ、我身のいきのあるうちは、御遺言にはゆめ背くまじ。

過ぎにしことはいかに嘆くも今はかひなし、いでやこゝろの駒にむちあてゝ、文の林にわけ入り、望の華を折りかざして、亡き父母の手向けにせむ、これを吾らの務めにこそとおほゆれ。

旅の二日

第三年級 北村 力

ふり續く霖雨月を亘りて止まず、かくてあらばいつかは泥水のおふれてわが身も家もおしかがされかん又心もくさりて、さながら疾病に悩める人のごとかりあんもをこの業あり、いで、行いて雨ふらぬ地を、求めばやと親しき、友垣をそゝのかし、葉月の初三と云ふに湖上の波を蹴りて西へと旅立ちしぬ、汽船は金龜山を後ろにして烟雨低う垂るゝ湖面を縫ひ波あきに眠りやしつらんとも見ゆ多景の嶋を後にのこしやがて舟は沖の島影に隠れぬ、雨に送られ雨に迎へられ、いづこも雨の里ありけりてふ長嘆はゆくりなくも友が口をすべりぬ。正午に近き頃に堅田に上陸して浮御堂に晝げを終へ、かくて雨の止むを待つ、待つ事少時遂に意を決し、雨を冒して坂本に向ひぬ、坂本は堅田を去る二里余、湖に近きを以て沙磧の道、加ふるに雨しきりにふり續き行路の難筆紙につくし難し、やがて坂本村の村端ある伯父君の宅を驚かし、かくて第一日の旅の草鞋を解きぬ。この日床に就きしはまた宵のはごありき。終夜、雨のたえまなく庭の芭蕉の葉をうつ音に寝られぬまゝ日記あごしたゝめつゝ夜のおくるをまつ、夜明けれども雨尚止まず。午前七時と云ふに朝饗を終り身仕度もそこゝにふりしきる雨をついて比叡の山に志しつ。雨雲抵ふ高嶺を壓して四顧朦々たり。上へ登るに従ひ烟雾、身邊をつゝみて呼吸苦しく且つ坂路急あるを以て更らに苦しさを増し唇焦れ舌燥きて一丁登りては憩ひ二丁上りては來し方を顧み、かくて龜堂に至り數滴の清水に喝を醫し午饗に腹をしたゝめて再び登り始む、天台宗中學及び大學費に至り暫時憩ひ之より右一丁たらずにて根本中堂に至り内覽を請ふ、番僧許さず、よりてやむなく中堂を廻りたゞ外覽にその場内の狀を察し、うらみを殘して去る、又登る事三丁余にて辨慶の力水あり一名千手水とも云ふ、其の冷やかある手に之れを掬ふ能はず。更らに登ること四丁程

にして四明ヶ嶽に至る、即ち頂上あり、寒氣身にしみて覺えず顫栗しつ中央に石墟あり、其の内に傳教大師の石像ありて洛陽に向ひて坐し給へり、同行三人互に昔日平將門が藤原純友と亂を謀りし所あるべしと話を合ひ京都市を瞰下す、流石千年の古帝都あれば人烟密なるも理りありと思ひ浮べつ。午後三時過ぎと覺ぼしき頃浄土院に入りて憩ふ。これより道を變じて下る事四丁にして傳法輪寺に至りまた憩ふ。木札いかめしう扉に掲げられたり、

桓武天皇願

傳教點定ノ地ニシテ本尊釋迦如來ハ大師ノ作、脇士ハ文殊普賢ノ二

傳法輪寺

大士守護神ハ天帝釋四天王十六善神ヲ安置ス承知元年圓澄和尚立其

後光明宇多二帝ノ御願ニ依テ再興ス。距今一千四十三年

明治九年十月

其れより再び道を轉じて登る事四丁余にして峰道に至りぬ、中央に二寺あり東あるを近江寺と云ひ、西あるを山城寺と云ふ。此の二寺の間は廊下にて人皆其の下を通行す昔日辨慶がこの二寺を荷ひたりてふ奇しき物語をのこせる所あり、それより下りて相輪塔に至り暫時足を休めつ、かくて峰道五十丁を越え横川元三大師堂に至り拜して後、一僧の案内に此處を去る二丁程の未明堂に至りぬ、此にも木札高う柱に掲げられたり、

大師諱ハ良源寛和元乙酉年正月三日入寂ス依テ復シテ元三大師ト稱ス。

跡今八百九十二年慈惠大師御廟

明治九年十月

本堂の左に一間余りの小堂あり之れを天狗の間と云ふ、此は昔日天狗を封じたるを以て今に至るも開けたることなしとし、開きたらんには此の山に大嵐吹きすさぶとかや。堂の後方に大師の廟あり拜して後僧に厚く禮をのべ午後八時過ぎ宅に歸りぬ。かくて第二日の、旅の衣の露をしぼりぬ。いでや明日の大津三保ヶ崎ある端艇競争を観ばやあ、明日のたのしみを夢に見てんとて枕につけば窓に近く雨の音しきりあり (完)

高野のもみぢ

第三年級 村上 義一

秋もやう／＼深うありぬるまゝに庭の木立も皆色づき初めぬ、名にし負ふ高野の山のけしきこそ如何にやあかれかと思ふにつけてい／＼みまほしき心地ぞする折りしもわが柴のおり戸をたゞくものありけるにぞ誰にやらんと立ち出で見れば日頃親しき友ども二人つれたちて訪へるありけり、すゝみゆく話しにつれて云ひけるよう今日はしも空よく晴れ渡りてあれば永源寺の紅葉を見んとてかくはおそろかしまつりぬ、いかにもろともいで立たせ給ひてはといはるまゝにぞ装束おさ／＼立ちいづる、道の程は八里もやあらん、されば新町高宮豊郷愛知川小幡あごの停車場を経つ八日市につきぬ。これより落葉いとしげき林の中の透々として左に折れては右に曲り、上りては下る道を婆娑々々として落つる木の葉をふみしだきつきぬ話のいと切れもあへぬたのしさに足のつかれも足にはつかず、やがて山上といふにつきつ。それより愛知川のみをかみを渡り、あはもうね／＼せる道を進むに、いつしか三人は、高野の山のふもとある紅葉の錦につままれてぞ佇みける。げにこのまのあたりのけしき、愛知川の水いと清らに砂白く、葉くれあるにめでたくこそまたをかしけれ。かくてその道を曲れば谷川にかゝれる橋のあるまゝに打渡れば磴あり、いとけわし。足のつかれける

をもうち忘れてのぼり行くに、青く紅き楓の中に佛閣のいとゞきらびやかあるあり。これか永源寺ありける。をちこち山のけしき、山門のたゞすまひいみじく美はし。見渡せば紅葉もてうづもれ、春の花を見たらむ心地、げに秋の山の清けくめでたくもあるか。

されどみどりのいろの今少しくれあむしたらむには一入のあがめあらましをこわれは無念のおもひにたれぬ。やがて楓樹の蔭によりて三つの道命寺に空腹を肥やしつ後ち磴を下りて磧に出で賤の翁に散策の趣きをたづねけるが翁はかたこたを指ざしつ何やらんおもしろげに一人の友にさゝやきけり、かゝりしほごに一人の云ふがまに、輕舟にさびのりつ支流をさかのぼりしにいとさはがしき水のさえぎを耳にせしにぞ何からんと思ひつ舟をまわせば一すじの瀑は崖にかゝり灑々として落ちくる糸の潭にはさゝやかある魚の樂しく群れて洄水いとゞ清かに紅葉のかげをやどしけるさま何にたとへむ。こゝろはさながら神仙の友とあるがごと、身は麗園に遊べるにてありけり、年來の鬱氣ものぞみも皆この清き水にあらわれつ、げにこゝろしかりけれ、あかねさす日の葉をもやさんするに名残をあとに溪を下りつ幾度か顧みつ、川を下りけり

管山寺に詣ず

第三年級 藤田 僕

頃は師走末つかた待ちに待ちたる冬の休みの來にければ日頃親しき友ごちと打語ひ今は昔宇多及醍醐のみかごの頃朝に仕へて間もかくわろき時平おとゝのためにつくしの海のあら波と共に消えにし菅原の君ある道眞公のいとおさき時學びの道に心を勵まされし地のふかきゆかりある管山寺にぞ詣でける此の日や枯木を拂ふ冬風の甚しかれど朝まだきより日は東の空より光を出し、かば互に笑ひもらしつ、高月の停車場に至りや

がて勇ましげに進み來りし北行列車に打ちのり變り行く窓の景色を眺めつゝはや木の本の停車場に着きぬそれより道を坂口に取り鋤とる翁にいづこかど問へば是より此の山道を登れど教へらるゝまゝにうあづき草鞋打ち直し古き烏井をすぎ苦しき胸を撫でつゝ險しき山路を登りつめば、こは如何に、木立ばかり生ひ茂り建物とては一つもあしさてはふみまよいしかとまゝを配れば西の方に一筋の道あるに心づき兎に角此の道を下らばやと皆の話しまとまりしかばひた下りに下るに漸く我が望みある管山寺にぞ着きにける是より朽ちかゝりたる門に入れば雪をあざむく白苔にて包まれし古梅のあたりせまきまで枝はへ茂り傍に菅公御手植の梅とあり余此に於て思うやう公はかゝく世を去り涼き國に至り給ひしより早や幾とせも立ちかけまゝもかしこき明治の御世にありしより公か芳しき名はこの梅の花と共に普く四方に渡りやがて御國の神と傳へらるゝ嗚呼勇ましきかゝ、公のいさをし、げにも云ひけり人は死して名を遺し虎は死して皮を残すと實に人初めて浮世の風に吹かれしより僅か五十路余りにして無常の風にさそはれ唯だ一片の石ぶみはさきがらのありかを示すのみ嗚呼唯か此の如き短き一生の中に於て公の如く己が譽を千代に八千代に傳ふるものいかにあらんあごかんが久しゆして去る能はず漸くにして本堂に詣でこゝろをたれ公が遺徳を追想して兼て持ち來りし握飯にすぎ腹を調へしばしいこひて我が屋へと立ち歸りしはたそがれありき

冬季休暇

第三年級 西川 修造

さあきだに。遠く郷を去つて學びに志す身は。花につけ月につけ。常に故郷を思ふの念。いと切あるものを況して吾が親しき里は。山緑に水清き所あるに於てをや。

頃は師走の末つ方。小兒の鎮守の祭を待つが如く。指折り數へて待ちに待ちたる冬の休みも愈明日かりければ。其樂しさ。はた何にか例へむ。臥床に入り眠りに就きけるは。九時頃にてゐる。又もや萬感交々集ひ來て夢結ばれず。彼を思ひ。此を考ふるに。何時しか身は風のまに／＼飛ひ行く如く。やがて住みかれし我が家の前に着きにけるよりあら嬉しやと思ふ一刹那枕元ある懷中時計の。かち／＼と響く音に。ふと目さむれば。こは如何に。いとあつかしき故郷の夢ありき。眼をこすりながら窓を眺むれば。未だ夜は明けやらずで。遠吠えの犬の聲又は窓の下を流る／＼芹川の水の音打ち交はりて。いと物淋しげに聞ゆるのみ。

時は十二月二十三日の朝またき。床をはかれて窓を開くれば。有り明けの月は淋しげに西に傾きて。向ふの竹藪に群る雀の囀るもいと心地よし。いざ。故郷に歸らんと軽く身支度を整へ。さらばと許り。宿の主人に暇を告げ。彦根停車場にと歩を進むれば。道に沿へる家々の軒のともしび青くいと物淋しげに光るあり。折しも二つ三つの明け鴉。城山の邊りより飛び來り嘉行／＼と鳴くもおかしや。午前六時五十分同窓の友ごち二三と共に瀛車に乗り込めば車掌の鳴らす口笛と共に。一聲の瀛笛勇ましく。彦根を後にして出でぬ。瀛車は黒き煙を長く延て。雲を追ひ風を切り。忽ちにして山を越え河を渡り。米原、醒ヶ井、長岡あんの諸驛瞬く間に過ぎ行も急ぎにいそ／＼吾が心には尙其遲きをかこつあり。車窓を排して眺むれば。過ぎにし夏の休みの歸るさは。目の及ぶ所千樹万草。綠うるはしく。そよ／＼と青葉を拂ふ風いと爽かありしに。今は早やしか過ぎ去りて。雪かと疑はる／＼霜は野をおほひ。そよ吹く風も身にしみて。いと／＼寒さを覺ゆるあり。進み進みて行く程に。九時近き頃我が柏原の驛に着きぬ。心勇み。いそぎ足にて歩を運ぶ程に。夢にも通ひし親しき我が家も眼前に迫りぬ。寒き風に吹かれつゝ遊び居りしわらべの歌ふ。『瀛笛一聲新橋を』あるは又『青葉茂れる櫻井の』あど聞くに付け見るに付け。只嬉しき心は胸に迫りぬ。

今ぞ誠に夢あらくに我家に歸り來ぬ。七才の妹は聲を揚げて出で迎へ。母のさぞ寒かりつらんと宜ふに予は暫しが間何の言葉も出さ／＼し。やがて一家團樂して過ぎ越し事共繰返し或は笑ひ或は悦びつゝ語り合ふ程に。日陰いつしか傾きて庭の小笹に音立て／＼窓うつあらし聲寒し。今日はいたく疲れぬれば。未だ早きにいぬ。

美しき日影の窓の隙き間より射し入るに驚かされて臥床を出で眺むれば。朝餉炊く家々の煙もいと／＼豊けくあたりの雞鳴に和して犬の吠ゆるもいと静かあり。朝餉も既に済みぬれば久しふりにて我が書齋を訪ひぬ。思えば去年の春『我れあしとて春を忘れそ』と言ひ残したる。庭の梅は我が言の葉にそむかで。此の寒きに堪えて。まさに花を開かんとす。折柄幼あ／＼じみの友尋ね來りけるより。過ぎにし／＼の物語の中に早や午后三時過ぐる頃とはありぬれば。友は夫れ夫れ立ち歸りけり。かゝる程に光陰矢の如く。早や正月も去り茲に二週間の冬休みは去りぬ。去るものは追ふべからず。いでや是れより。奮ひ起たん。一月七日七草のかゆをす／＼込み。再び學びの途に着きぬ。

春景

第二級 秋篠義一

氷消えて、浪舊苔の鬚を洗ひ、氣晴れて風、新柳の髪を梳り、連山縹渺として雲霞の間に隱見し、幽谷の黄鸝は嶺の花に遷り、籬邊の早梅先づ數點の花を着く、午間は微風人に適するも、朝夕は春寒骨を徹す、是れ初春の景あり。

既にして、宿雨一霽東風徐々に庭階に灑きて、輕塵を浼し、柳色を翠にし、是より將に百花爛熳の候に入ら

んとす、既にして鳥歌ひ、蝶舞ひ、花卉は燦々として千紫萬紅嬌艶を競ひ燦爛として錦繡を織るが如く、春色駘蕩として、人を惱殺す、若し幽草を踏んで花を郊外に尋ねんか、綠塘を渡りて韻を柳下に探れば、水澄々として海棠の眠氣ある、蜂蝶の翩々たる、遙峰の翠嵐畫けるが如く、滴るが如し、唐人の所謂、紫陌紅塵掃面來無_レ人_レ不_レ言_レ看_レ花_レ回_レの眞狀を描き出し滿城花に狂す、之を三春の光景とす。

若し夫れ隴ろに霞める春月霏々として、中天にかゝり、花影朦々として唯一團の紅雲を簇すが如く、寶鴨煙消えて夜色沈々たる時、何れの所の仙姬か、欄に倚りて玉笛を吹き、其聲は花間の清香を和せしむるは春夜の景あり。

殘月斜に梅樹を掠め、宿靄山河を包みて曙色漸く鮮あらんとし、鐘聲曉雲を破り、旭日疎簾に上り、花影窓に映じ、啼禽我を呼ぶに似たり、之れを春曉の光景とす。

樂事未だ盡きず、東風一たび吹けば落花は清漪に漂ひ、流鶯百轉滿眼紅意少あく、日に綠葉の増すを見る、東皇是に於て、か歸轅を廻して新緑鳴鶯の時とある。

春 雨

第二級 德 永 英

四つのごき、降る雨にかはりあけれど、春雨はご長閑あるはあらじ。

けふは空よく晴れて、柳の糸のよりくに、吹く風さへ心地よし、あち麗かる眺めやと、吹く春風に袖かへしつゝ、そこそこあく、あくがれしに、やがて午後二時にも近き頃より、空はにはかにうすぐもりに曇り、遠方の山々は雨の烟にごちられて、いづれともわかねど、近きはたちこめたる霞に、かげおほるあるさ

ま得も云はれぬ風情あるに、庭の柳の枝あごのゆがへる、又は蜘蛛のつとに玉ぬける様あご、あはれ繪にもかまほし、櫻はご見れば、これもめぐみの露にうるほひ、朱き唇をやぶりて、おもはゆげに匂ひいでたるがおもげにぬれし花の風情は、朝日にかゝりきたらんにも一入まされり、此雨にて、里川の土筆も賑ひかん東の山の薇も拳をふり上げんあご、里のおのこのうわさしあへるも、又耳新しくぞ覺ゆる、夕つ方にありて雨ゆくりかくはれし折から、臆に霞みていでたる月影の、わづかる木蔭にはのめき初めたり、余りのうるはしさにわれにもあらで立ち出づれば、折しもさぞ吹く小嵐に、散る櫻の花の一ひら二ひら、さゝかみおこを水の上に舞ひ落ちぬ、誰がすさびにや、彼方に聞ゆる笛の音の、一聲高く、一聲ひくく、いとしめやかに聞ゆるいとおかしく、塵の世に住みはあれし心地しぬ。

あはれ、うれしくもあり、悲しくもあり、悦びもあり、かげきもありて、思ひ絶えせぬは、實にこの雨にこそ。

修學旅行記

理 事

五年級修學旅行記

千里の駿足ありと自畫自讃すること能はずと雖も、とにかく健脚隊の膝栗毛、久しく厩の隅に繋がれて糟糠にも飽きたれば天高くして馬肥ゆる秋、いでや鞭をあげて琴平地方の勝を探らむと出で立ちし同勢は健兒三十有七、時は維れ明治三十五年霜月初の五日あり

扁額をうちたり、更に中門を出れば後水尾天皇の本像を祀れる沙理殿あり、隣れる天主殿には毘沙門天儼然として佇立し、其の周圍に四天王を安置す甚異觀にして考古學上、歴史學上一顧の價值無きに非ず、其他大師堂、祖師堂等一々枚舉に遑あらず、寺僧に従ふて賽す、門前に古池あり、こは京阪の信者の力を合せて掘りたるもの、底は切り石にして中央に深窅あり、嚴冬凍水の際と雖も捷魚死すること無くして之が主唱たりしものは開祖ありといふ、若し夫れ萬福寺の幽邃を賞せんと欲せば自ら行いて訪へ、奚ぞ余輩が禿筆を以て實境の萬一をも盡し得べけむや、また住持が何角と一行に便利を與へられしは我々の深う感謝する所あり斯くて午前七時半、御坊に別を告げて路を平等院に取る、道路甚だ平坦あり、勇を鼓して或は大聲に軍歌を唱し或は詩を吟するものあり、行くこと半里にして菟道稚郎子皇子の御墓に到る、古松蒼鬱として蒼生し、廻らすに蘚苔を被れる玉垣を以てす、思はず壬申の昔を忍び轉た感涙に堪へず、再拜して進めば左傍に芝丘あり、孤樹の下、碑石空しく存す、露苔深く生じて、「扇芝」の文字さだかあらず、源三位賴政の切腹地と聞かたへの碑石又紅苔を載す、其碑歌に曰はく

花さきて身とあるからは後の世にもとのふの名もいかでのこらむ

江戸 佐藤氏宣張

之を辞して平等院に至る、偉大ある宇治製茶紀念碑を眺めつゝ、見るべき寶物如何に夥しからんと勇みつ進み行けば、豈計らむ修繕中にて「無用之者不可入」の立札、我一行を迎へむとは、嗚呼遺憾千万ありと、互に顔を見合すこと稍々多時、此より引き返して宇治橋畔より小船に賃して宇治川を下る、時に午前八時二十五分あり、船の進むにつれて四近の風光益々奇を極め、奇岩怪石、点々横臥し、流勢急からずまた緩からず右には雲烟渺茫の間遙かに大和の山々屏風の如く連り、左は平野一望、遠くひらけて、松を含み村を帯び麗々仙境に逍遙する心地す。

徒然あるまゝ雙眼鏡を手にしてそれとなく四方の景色を賞しつゝ右方遙かに崇行院皇子の御陵を拜し、觀月橋を経て九時二十五分伏見に着けり、小出先生の案内にて工兵第四大隊營内を參觀し此に久し振にて器械体操を試みたり、「皆横着だ」と叱られて後御香宮神社に參拜す、神功皇后を祀れりといふ、十一時十五分淀川汽船に乗じて大阪に向はんとす、勇しい哉三十有餘の快男兒、壯ある哉此行、皆甲板に來りて詩を吟じ、千山萬水の秋景を恣にす、晝飯を終るや否や、二時五十分大阪八軒屋に着す、之れより先船暈病氣等の爲めその後、我行に加はることを得ざりしもの曰く門根君、曰く室谷君、曰く杉本君、曰く吉田君、曰く澁谷君哀れむべく又惜むべきことあり、直に商船會社に到る、時に幸！幸！道すがら心に懸けたりし保津川丸は將に出帆せんとす、急ぎに急ぎて打ち乗りぬ、午後四時〇五分船は錨をまいて多度津に向ひぬ、折しもボーイの新聞菓子とぞ連りに勧むるまゝ買ひて讀み且食ふ、久しく汚穢ある空氣を呼吸しつゝありし我が一行は清麗ある茅海の眺に接して甲板に上る。

見渡せば聞に聞きける築港工事、既に半成りて黒煙を吐ける大船、小舟右に走り左に飛び安治川口に入るあり出づるあり、眼を轉じて前方を眺むれば淡路島山遠く雲烟朦朧の間に蟠り、藍よりも濃き海原は渺茫として幾多の鷗の夢をゆすり、青螺点々、水烟模糊の間に浮ぶ、欸乃ゆる／＼水を渡る所、眞帆片帆蒼波の面に散り亂れたるゑご恰も天然の好畫幅！入りては友と談じ、出でゝは自然の大觀に嘯きて、感に堪へざるとき船は轆轤軋々、靜かに水を別けて進みしが一の觀念は我胸を潮りき、驚濤騰々として鬼踊り龍舞ふが如く、彼方此方に鯨鯢嘯きて悽愴の感坐ろに身に泌むもいと、はづかし。

既にして我にかへれば、さしも照りわたれりし日影も、漸く西山に沒せんとして夕映は穩やかある海の面に落ち、紅の色サツト流れて白き波蒼き水を彩れり、見る／＼夕陽は薄紅、橙色、蒲色、と次第に變じて遂に

其姿を隠しぬ、折しも來かゝりたる水夫に案せらるゝ播州灘は尙遠きかと問へば尙遙かなりと答へぬ、聊か夕和は出でたり、元より今宵は波靜かある梶枕とて心地よきこといはん方あく、衆皆舷頭に立ちて歌ふ、願れば渺漫限なき浪路の末、攝津の山々は黛の如く烟り麓に漂ふ白雲一抹、波の彼方に遠く消えゆきて夜の帷は垂れたり、水夫に促されて船室に入れば薄暗き洋燈の光に、可笑しや足の蹈む塲もなき迄或は打ちころがりたる者、或は飯を食ふ者、スケッチに日記をものする者もあれば或は大聲に雲耶山耶を歌ふもあり、

轟々たる汽笛、船は神戸に着きしを報じぬ、急ぎて甲板に上れば埠頭の電燈燦然として輝き、江風寒く面をうつ、時に午後七時、命あり、姫川丸に乘移るべしと、此に衆勇みて尙一層大ある姫川丸に走り乗りぬ、船客多くして入る能はず、遂に椽の下のように船客室に叩き込めらる、不平を洩らし怒ること限りあし、我等は恰も梅干桶の梅の如く、豕小屋の豕に似たり、點檢に一匹二匹……と數へられたる、滑稽の極ならずや、余は奮起して播州灘に千鳥と語り、滔々たる波に詩囊を洗はんとせしがかくては其勇も潜然其隱るゝ所を知らず然るに先生大に盡力を賜ひ余輩六名を限りて中等室に移らしめらる、其喜び筆紙の及ぶ所にあらず、中等室に入れば意氣揚々たるハイカラあり、八字鬚厳しくひねれる縣属連の一行あり、商人らしき男二人、さては麗々たる女子等十四名と數へられぬ、

下等室とは大に異ありて満室肅然たり、肱を枕にしたるまゝ眠り／＼て船の多度津に着きし時漸く醒めたり
氣遣ひたりし播州灘は如何ありしか、之も夢の間にありき……

* * *

第二日（火曜日）晴

ふと目醒むれば、蓬窓簾々として聲あり、雨にあらず、やど驚きて、既に起き上れる友に問へば、舳を撲つ小波の聲にて船は早や多度津港に入れるあり、あはたしくも熟睡せる友を揺り起しつゝ、草鞋を穿ち、草鞆を肩にし、上陸して琴平に向ふ。時は尙ほ草木もねむる四更の頃、残月漸く光失せて西山に落ち、冷氣凜然肌に徹す、行くこと三里餘にして吉田村あり、時に善通寺ある輜重兵第十一聯隊の起床喇叭は嚙唳として響き渡り、旭日東雲を破りて山の間より出で夜は全く明け離れたり、午前六時發の列車に投せんと欲して善通寺驛に到る、既にして之に乗じ汽笛一聲琴平に向ふ、眼を車窓より放てば彼方の千町田、早稻もおくても皆刈り果てゝ、落穂拾ふ雀の群れ、右に飛び左に踊り、此方の莖園既に蔓あく諸畑早や葉枯れたるに、餘念を歟を取れる農夫、芋や堀るらむ白手拭に赤襷かけたる女、皆我れ等が燦たる一中の徽章を怪訝ある顔に見かつめたりしが、隈なき旭光其靱に映じ輝々として我眼を射ぬ、一峰去りて一巒來り、一河沒して一江現はる常盤樹の翠綠滴たる中に、燃ゆるが如き紅葉の点綴したる、翠と紅と相映發を其美景を賞する間もなく、汽車の走るまゝに、早や彼方に見えずありて象頭山は毫爾として我一行を迎へたり、琴平々々と呼ぶ勇まじき驛夫の聲に驚かされて汽車を下り象頭山を顧みつゝ行く、町は殆んど旅館のみ、琴平宮に賽するもの、誰か其規模宏大ある旅館の多きに驚かざらん、鞍橋を渡れば梵字かぞ書きたる、編笠をそびらに負へる夫婦伴れの巡禮あり、虎屋てふ旅館を指し問ふて曰はく、これ四國の本願寺さまにあらずや、と一行之を聞き抱腹せざるものかし、

我一行は頼山陽先生の命名したる芳橘樓といふ旅館に投じぬ、此にて朝食を終るや否や、豫ねて希望の琴平神社に詣でんとて、大ある華表の下にて衣襟を正し、肅々として進み行くに、兩側には金品を献納せる面々の姓名を彫刻したる石柱其數を知らず、石磴數百級を昇り社務所の左を過ぎ行けば手洗所あり、手を清め身

を淨めて真鍮の大鳥居賢木門を過ぎ拜殿の前庭に出づれば、森嚴の氣自ら人に迫りて威靈冒すべからず、此に一同脱帽し拍手して邦家の長久を祈ると共に又我第一中學校及び余輩前途の盛運をも祈りたり、片への石垣に倚りて遙かに見渡せば讃岐富士の峻峰は、翠色青空に連り、白雲は其頂を閉せり、中腹に至るに従ひ、次第に碧色を増し、曉霧僅かに霧れて嚴めしき五剣山は其清鮮ある姿を顯はしつ、其後方の山脈遠く連りて海に入る所、真帆片帆の鏡に似たる海上に往來せる、漁家蟹舎の汀渚に散布せる又は幾多の島嶼朝靄の裡に頭角を表はしたる等、實に一幅の好畫圖といふべきあり、漸く駿馬の一聲に驚かされて、足を厩舎に移せば神馬三頭あり傍らに銅の大馬を安置す、土人傳ふ、之れ神代の昔此宮に祀き奉れる大神の御親鞭を採られたるものありと、更に繪間殿に到る、仰げば幾萬の扁額あり、落剝して文字定かあらぬもの、祈願成就と大書せるもの、殊に名高きは濱田彌兵衛の臺灣土匪手討の圖、森狙仙の猿、文晁の羅凌王、客齊の爲朝、圓山應瑞の童舞陵等にして扁額尙鮮やかあるは征清役戰捷後各師團の將校より奉納したる戰爭の圖あり、古きは神代の物たるべく、骨董商に見せおば垂涎三尺おらしむるもの亦夥し、一々枚舉すべからず、此處を辭して末社ある山手の曉魂社三穗津姫神社に賽し、銅馬の右側より石階を下り、旭社の傍らに出で漸次降りて前途に復し旅宿に歸りぬ、一行共に火鉢を擁して語らふ折しも宿主列に加り大に氣焰を吐きて曰く「金刀比羅宮に參詣せられたるは可あり、公園に逍遙し給ひしやと」一友答ふるに否を以てす、主人笑ふて曰く「本宮に詣で、彼の公園に登らざる人は郷里に琴平土産を忘れたるが如しと」一行之を聞き更に相携へて其道の由る所を尋ね主人に案内を命せしめ、一の鳥居を過ぐれば左に鼓樓あり、其傍に清塚とて清少納言の碑石あり、大門の内には五人男商店と唱へ名物館を掲ぐ、櫻の馬場と云ふは此處より社務所の下迄を總稱す、道路平坦にして中央は砥の如く石を敷きつめ、左右玉垣の内には數百本の櫻樹を植え其下に石燈籠數百基あり、春花爛熳の頃

には最も美にして遠國より參詣する人も一見忽ち心酔して數千里の歸路を忘れ花間に躊躇すと云ふ、更に進み行けば頂上に達す、掛茶屋を設く床机によりて海上を見渡せば青藍を湛えたるが如く、白帆の往來宛も鷗鷺の相逐ふに似たり、東北を望めば九龜城五剣山八栗山等紫翠を凝らし風光絶佳あり、實に人をして神氣爽かからしむ、公園には梅櫻あり楓樹あり春夏秋冬杖を此に曳く者多しと云ふ。殊に大書すべきは本殿の側面に金銀燦爛たる櫻花の艶麗にして巧妙を極めたる所、見る者驚かざるあし、

午前十時八分金刀比羅宮に詣でたり、種々の名物も買ひ調べ、日頃の宿望既に逐げられたればいざこれより踵を返して歸郷の途につかんと欲し意氣數倍旅宿を發し、駈走にて停車場に到れば將に汽車は走るべく黒烟を吐けり、機を逸せず、瞬く隙に乗り込みてヤット一息つけば汽車は名残を惜むが如く我一行を送る象頭山を後にして進みぬ、無情ある黒烟は見る／＼山を蔽ひぬ、いざさらば長へに幸あれ！山よと云ひも終へぬに早や汽車は善通寺驛に着けり、下車して善通寺の勝を探らむとす、驛の西方數町にして達す、堂宇他の奇かしと雖も境内廣く嚴然たる殿堂は昔ながらの姿を存し、榮華の昔を忍ばしむ、門前に老楠二樹あり、千古を變せず其高さ二丈餘、周圍二丈に垂たり、御影地として弘法大師の手にあれるものあり、老松蒼々池水に翠影を映じ、石佛二三点々として存す、偶帶取れる眉雪の老僧に會ふ、時に箒を止めて落葉深き所大に説き給ふ、

時正に午前十一時、説法訃にして名殘惜しけれども、あゝ時あきを如何せむ、此に寺僧に謝して第十一大隊營所の前に到れば交叉せる日章旗飄る、吾れ其何故たるを知らず、金條正帽の將校快鞍還しき駿馬に鞭ち、「氣付け！」「番號！」「二三……」中には曹長あり上等兵あり二等卒あり、一命の下何れ劣らぬはあらねど一年志願兵の横目もふらぬ眞面目顔、最ども其動作の活潑に見えたり、幸に先生が知己の照會によりて某故參の

小隊長來り、軍事庫、軍器庫等一々説明の勞を取られしは深く謝する所あり、遂に辭して營外に出で駈足に停車場に到る。汽車は既に着けり、乗り外れてはと急ぎ飛び込みぬ、四邊の光景好からぬにはあらねど絶景絶美の感にうたれし一行は左程にも感せず早や行厨を開けり、一滴の甘露もがと咽喉撫でつゝ上等室に到る室内には両先生の外に縣屬らしき人四五名と女學生らしき二人の女子あり、縣屬連は皆八字鬚を蓄へ卷簾を薫らし、喋々と廳内の人物評議することなく女子は流行の英吉利卷に黒髪を結び絹のリボンを飾り、蝦茶の袴を穿ち徒然あるにや、窓に肱枕して會話を試む、一行は土瓶一個を得て三十人して舌鼓數番、漸く一喝を醫す、金藏寺驛を過ぐれば清麗掬すべき多度津の遠望、詩人をして見せしめあば如何に詩囊を豊富からしめん、汽車の左方を眺むれば、散在せる數多の小嶋渺漫たる一碧の江面に其影を倒し、蜿蜒起伏して灣を遠く圍繞したる山々、雲霧に閉ぢられ濛々として墨繪の如し、遙かに渺々たる水上に一抹の黒煙を吐いて次第に影少く東方に急ぐは定期船あるべし、此の自然の景に接したる吾一行は恍惚として默然たりしが、自然の神の懷に迷へるが如く老莊の所謂無我の境に入るの心地あり、一行感嘆の膝を拍ち激賞の叫を發する程に、つれなき汽車は此の面白き海の景色を後に、矢よりも早く進み行き、丸龜、宇多津、鴨川、鬼無等の諸驛四分の間に過ぎ、家送り山迎へて待ちに待ちたる高松驛、一聲高く停車の汽笛は響きぬ、午後一時五分道を栗林公園に取る、高松の外廓、右は水田相連り人家疎あり、道端に咲き残れる野菊一輪、僅かに秋のあはれを止む、程なく高松街道に出づれば「栗林公園迄五丁の立札あり、衆熟視して喜ぶこと限なし、數分にして達す唯見るものは數株の松梅と宏壯なる建築物にて、一行落膽色を失ふ、栗林の公園は之にあらずと發議するや其説に同意を表し先づ香川縣博物館前に憩ひて高松ホテルに立寄りし給ひし両先生を待つ、「下足無用」拜觀料貳錢」の貼紙あり、暫したゆたふ程に先生來り給ひ、何だ早や公園を一周し終へしやと問はる、一行訝り

て答ふ、公園は何處かりやと、先生手を拍ち笑ふて默然たり、吾等は知らず此の休憩の地公園の入口あらんとは、案内者がましき先生の後に從ひ繁茂せる松並木の間を過ぎ眞の公園に出づれば、風光美にして奇松怪石多く、中央の園地は宛がら我琵琶湖に髣髴たり、池中に存する二三の島嶼は松楓其上に戴き、怪松影を碧水に涵して老龍の潛むが如く、或は青苔巖を封じ、或は大魚小鱗群ををし、或は白鶴枝葉の間に隱見するかご佳景名狀すべからず、乃ち一茶店に入り案内圖と有名ある平家蟹を購はんとす、一翁出で來り待遇に意を注ぎ茶代を謝絶せしは一の愛嬌と謂つべし、

抑も此公園はモデルを東海道十三州五十三驛に取る、誠や函嶺は坂路や嶮しくして草鞋切れたり、轟々雲を凌ぐ計りの富士の峰は到底登るべくもあらず、洋々藍を湛はす濱名湖を過ぎ飛驒美濃の深山を出づれば浮見堂見ゆ、まさしく近江八景の一にして人工とも思はれず、唐崎の松勢田の大橋小橋、我彦根城下八景亭の小天地に比す、兄たり難く、弟たり難し、と評して止むべきか、

一時間にして一周するを得たり、飽くまで此の自然の大觀ともいふべき景に接したる吾一行は恍として默しぬ、吾はかく思へり、暗愴たる社會の潮流に沈み不義悖德の濁浪、鞆鞆として寄せ來り、吾を驅りて沓然たる魑魅魍魎の群に入らんよりは成し得べくんば五十の一生涯、此の崇高にして且壯嚴、圓滿にして且つ優美無垢ある美神と冥合し、光明に照らされ醍醐の妙味を吸収して人生を歌はんと欲す、かく空想に驅られし時ふとかへり見れば一行既に出立せんとす、乃ち屋島に向ふ、此園の面積は往時松平藩主の別莊たりしとき四萬坪に充たざりしが、今は脊後の紫雲山を崩壊して實に十六萬五千五百三十八坪に至り日本三大公園の巨擘たりといふ、

町又町の高松を離れ、野中の一軒屋にて草鞋を穿きかへ屋島の渡に到る、夕陽西山に落ちんとし、屋嶋川の

中流夕榮の色に映じて燦たる金龍を水中に踊らす、時に酉の刻に近し、急ぎ舟人を呼んで屋嶋川を横ぎり、小堤に登りて屋嶋村に入り道の由る所を問ふ、一田夫の歸路に會し、後を逐ふて小逕を進む、朽ちたる山門の前に彼の田夫と別れ、教へのまゝに道を左すれば、やう崎嶇たる山路、砂石累々として草鞋を嚙み夕陽輝として斜に頭を射爲めに流汗津々、頻に渴を覺ゆ其苦實に言語に堪えたり、中路に一古刹あり、屋嶋寺といふ荒れ果てたる籬破れて白萩空しく亂れたり、一行中口吟するものあり

訪ふ人もたえてあらしの屋嶋寺

まがきのはぎのさきみだれたる

と、横道をぬけて進めば嶮峻、一步一喘、あらゆる登山の艱苦は茲に盡されて漸く絶頂に達す、一の觀音堂あり、白壁に濁水の注ぎし跡あるは修理行き届かず、したゝかに雨露の洩りしにや、欄干をぞに怪しき筆の跡あるは誰が戯の所業ぞや、

實に地は興亡の史跡ある屋嶋あり、血の川會て之に流されぬ、屍の邱會て此處に築かれぬ、權力と榮華と利慾の爲めに、幾多の犠牲が齊しく劔戟の下に伏したる古戦場あり、茫々七百年、江山は歴却の觀を留めて會て其史を語らず、唯だ吾人に寄せて古今の感を催さしむ、嗚呼星霜を経たる幾百、春風秋雨の跡哀れに颯々たる松風、颯々たる波聲轉た懷古の念に堪へざらしむ、思へば紀元千八百十九年の昔、平治の亂に功ありて平清盛は遽に公卿の間に列し、高倉天皇を立て己が女を入れて、朝權を専らにせしより數十年、入りては法皇を幽し、或は院の官人を斥け、出でずは榮華を極めたりし平氏の一族も其末路や如何に、實に壽永四年頼朝が追手に亡ぼされし、歴史を有せる此屋嶋也。榮枯盛衰は浮世の常、一落一榮之れ春秋と云ひ乍ら、天も亦何ぞ人を弄するの甚しきや。

あゝ變れる世の有様哉景色を見て情起ると我は無限の感に打たれ、雙眼鏡を携へつゝ茫然として立てり、折から吹き來る一陣の冷風、霜葉二三を翻して人を襲ふ此に於てか一行茫然又無慮。莊麗ありし山門も朱の色剥けて木地のみあらはに仁王尊は金網破れて内に蜘蛛の巢縱横上下し、狐狸の住家とあり、踏石のあはひ、名も付しらぬ蟲の聲々いと切あり。忽ち聞く左の方近く吠犬の三呼するを、乃ち足を進めて茅屋に到れば柱朽ちて戸は鎖されたり、僅かある戸の隙より内を窺ふに古びたる幃幃長くかゝり人の住むべきけはひも見えず又犬もあらず、須臾にして六十近き翁嫗二人刈柴を脊にして歸り來る、迷頑の者一禮をささず問ふて曰はく何用の候や、吾一行は源氏の末裔にもあらず今少し物柔らに語れと咤けば「先づお這入り、お茶も進め申し候に」と、言短かに言ひ放ちて早戸を開けば外装にもまして美しかりけり、茶も喫すべき時間あれば手桶の水一掬戴いて有名ある屋嶋竹を參錢にて購ひ、興は盡きざれども前途猶高松に歸るべく、五十餘町あり、いざやと又も舊路を探りて、高松市に入れば既に日全く暮れ、電燈皎々たるを見る、時に午後八時ありき。

屋嶋に到らず足を長うして全輩の歸路を待ち受けたる弱武者と共に高松ホテルに夕飯を喫す、既に洋燈の下、屋嶋の記行を紀し終れば午後十時二分、宿婦の促したるまゝに倉忽外套皮靴杖を手にし乗り込みしに、利根川といふ六百五十噸の大船ありき。十時半船は進行を始めたなり、船は可なり大ありと雖亦家小屋の如き椽の下、にで黙してたまるものは、暑さは烈しくして流汗願に交はり心もほゞ消え行くべき覺ゆるに、靜かに身を横へんと足を伸はし眠るとはかしに一睡を貪れば一行苦しさに堪へざりけむトヲ／＼と甲板に登る響きに驚き、目は冴えたり、吾もデツキの上に登れば此所を播磨灘あるも、今宵は波いと靜かれば各安心の思ひをあす、船の漸次進み行く程に海は次第に開け、前の漁火後に廻り、東の方遠く淡く水夫相接して青一髪を曳けるは雲か山か。やがて水夫に促されて又船室に入りぬ、折しも波聲の

まに／＼何やらん鳥の聲あり、友はいふ千鳥やらんご、忽ち手帳を取り出だし

梶まくら波もしづけきはりま灘

船窓ちかく千鳥おくあり

と書き付け、又も眼を閉づれば、何時しか華胥の國に遊びぬ。

第三日 (水曜日) 晴

午前四時四十五分船は神戸港に入りぬ。一同檢疫を終へて今か／＼と船の解纜を促すに印袴纏を着けたる仲仕は、積荷下し荷の勞働に忙けしく、漸く八時といふに發す、急ぐ旅路にかく時を移されていかで默すべきか。愚痴を洩らせしも數分、船の賄ある朝食を喫す、了つて甲板に出づれば波浪靜かある神戸の海は漫々として遙に港へ一刷毛曳けるが如き武庫の山々、夢より淡く打烟りつ、緑の色いと床しき磯邊の遠近、波に漂ふ白帆の影に金をも溶かさ朝日の光り隈なく輝き渡れり、深碧の空拭ふが如く霽れ渡り、蹴立つる波の聲勇しくも船は進み、青松白砂の絶景を賞する少焉にして午前九時終に天保山沖に達し、同三十分川口に上陸するを得たり、客を乗する人力車、荷車を運ぶ車 互に絡驛し行人織るが如き大阪の市街を右に曲り左に折れ、北野天満宮に少憩し、更に町を離れて北に向へば一天晴朗として煙霧濃淡、田野の間を込め、秋風徐ろに旅士の鉄衣を翻へし心神の爽快を感せしむ、足を早めて豊崎を過ぎ豊崎の橋畔に到る頃、陸軍の砲兵、騎兵、歩兵等帽影燦爛と朝日にきはひたる正装に威風凛々として馬上より徒歩より一隊來り又來る、之れぞ第四師團の大演習の歸途ありと聞き、一行の者も弱れる体を兵士に見らるゝあと戒しめ合ひて、俄かに力みか

へるも片腹いたくをかしかりき、やがて一河に會ち、水田川と云ふ、橋を過ぎて河に沿ひ數町すれば、吹田のビール會社は賑々黒烟を天上に吐き、視線の及ぶ限り見渡せば、右の田も左の野も馬蹄の趾のみ存す、是れ即ち先の日、第四師團の將校士卒が駿馬に鞭ち、田野を縱横に馳驅し、砲聲銃聲は四方に轟き、震天動地の勇を震ひ、氣を焰にして、一時修羅場とありし地あり。

或は吟じ或は歌ひ談笑回顧しつゝ進む程に、ビール會社の北一里餘、道は二岐す、衆此に色を失ひ、道の由る所を問はんとす、左の方二町の處に一茅屋あり、抽籤したるに霞城、松涯の二氏任に當る、路傍に休憩すること數分、漸く二氏歸り來りて右すべしと傳ふ、道は一轉して田畑の間を通ず、田家の光景又愛すべし行くこと二里餘にして茨木に着す、正に午後三時三十五分、小學生、中學生歸校の途に會ふ、一行は茨木中學に入り寄宿舎にて晝食をあす、菓子饗應を稟く、丁寧懇切ある待遇一方あらず、感謝々々、食後直ちに運動場裡に出づればテニスの大會あり、師生交々東西に分れ、よく争ひよく戰ふ、講堂の下ある雨天体操場を道場に充つ、到れば竹刀頻りに聲あり、疊上に稽古襦袢のまゝ点々轉がるものあり、全校生徒共同して快遊する所余輩が吃驚仰天も當からず、實に驚くべきは校内の清潔あることあり、食堂は勿論、教室樓下の清潔にして樂書あごに至りては到底我が校の比にあらず、生徒皆樓下を跣足にて往來す、一機軸を出せりと稱する者もありき、午後四時〇五分代表者をして謝辭を述べ、門衛に一禮して高槻に向ふ、間説、高槻は此の地を去る二里の地ありと、一行勇みて進む、今更愚痴を洩らすも詮方あけれど、此頃の日足の早きは眞に流るゝ水よりも早く、我れ等が樂しき旅の空に立ち出でしより、はや三夜三日を過ぎて、明日は我等が旅行も終りと聞くぞ口惜しき。午後五時廿分、高槻に着し旅館三忠樓に宿す、花の都にはあらぬ高槻の地、見るべき物もあけれども旅の宿りの嬉しさも、僅かに今宵一夜あり、今宵こそ茶話會を催して十二分の歡を盡く

すべけれど發議する者ありしかば、衆議之れに決し、夕餉もすまし、浴みも終へて足の疲れを打ちやはらげ環坐すれば早や下婢は蒸したるボットを持ち來り、次で茶を持ち來る、且つ飲み、且つ食ひ、互に今日迄ありつる旅路のすぎたる種々の話を繰り返へし、或は吟じ或は舞ひ、皆十二分の快を盡くして、臥床に入りしは十一時半頃ありき、余興中長く念頭に残りて面白かりしは、近藤氏の劍舞と、今村君の吟詩、さては那須君の「精神一到……」の一吟。

此の日始めて衣衾を蒙る、行程八里半。

第四日（木曜日）晴

滿天の星影は尙鮮明に輝きて寂莫たる高槻を隈なく照し、蕭颯たる曉風は嚴霜の氣を帶び征衣頗る冷あり、午前六時例によりて握飯附の朝食を終り高槻の旅舎を辭しぬ、「道は六百八十里……」の歌に心をやりつゝ進み行けば旅の疲れも二三里が程は覺えざりけり、かくて石柵を繞らせる二碑の立てる前に出づ、一は自然石記して楠公訣兒之處と、一は花崗石題して忠義貫乾坤云々と、傍らに朽ちたる古楠あり、一行恐れて手を觸れず。嗚呼此の地此の方丈に滿たざるの地、涙に咽びつゝ建武の昔を忍べば誰か此の二碑に向つて千樹の涙を灑がざらむ、吾人は徒らに蛇足を加へて楠公の功績を頌揚する要あり、然れども唯景望措く能はざる者は曾て楠氏が王事に盡瘁し、西海の逆賊、東岳の亂臣雲霞の如く寇するも怨む色なく恐るゝ姿あり、徹頭徹尾南朝に従ひ奉り、千早に逆鋒を挫き赤坂に賊勢を惱まし、時あつては龍顏に拜謁して宸襟を慰め奉り、敗又破ると雖も猶死に臨みて愛子に教訓へたるが如きは、實に吾人が學ぶべき點にして、其の精忠内外の史上に

徴すも其の比を見ざるべし、嗚呼當年の古楠尙存在すと雖も樹間に菊水の義旗を見ず、莽々たる小丘今尙存するも天地を貫く英雄の義魂今何處にか屯する、唯小丘二碑吾人に寄せて今昔の感に堪えざらしむるのみ、拜又拜袖に打かゝる涙を拂ひつゝ進み行けば天王山あり東より南に繞りて山に登る、山路崎嶇たるにあらざれども棘蔓逕を擁して道なく、簾を越え樹根を攀ち、溪流の間を傳ひ喘き／＼て登ること半里餘、殉國十七士墓に詣る、一同拜し終りて皮靴を下せば正に十時〇二分あり、山麓に銀蛇の如き蜿蜒たる宇治木津の両河相合して淀川とされるを瞰下し得べし、眼を轉すれば遙かに京都伏見は一目中に存し男山の森鬱々として蹕り東山障壁をあす所眺望大に佳あり、愈進めば愈急あり、氣息奄々漸く山頂に達す、これぞ天王山の頂にして烈士の墓表數多あり、外側稍高きものを石田三成の碑とあす、苔深くして刻字讀むに耐へず、秋風肌を襲ひ寂氣人に迫る、之を辭して又小逕を辿り、迂りつ轉げつ辛うじて淨土谷を踰え、十一時十五分金ヶ原に下る松堤を出づれば名にし負ふ今里公園あり、靜に讚美の歌をうたひつゝ紅葉の蔭を逍遙ひつる折しもあれや、天より落ちたる颯爾の微風に紅葉飛ぶこと一点より二点、既にして七八点やがて繽紛として落花の如く舞ひ落ち潭淵に浮びぬ。美ある哉。古人をして車を停めしめ二月の花より紅ありと歌はしめしも故ある哉と思ひつゝ或る男は一首を咏じて

二月咲く花にもまして今里の公園のもみち葉錦とまがふ

公園の傍らある天神社に參す、暫時休憩して夫の伏見驛にありたる翁と再び語り、彼曰はく「袖振り會ふも多少の縁、一昨日伏見に會し今日亦此に卿等と遇ふ、何かの御縁に候はずや……卿等は何處の人にて候ふや拙翁は三河の藩士、冠して彦根城主井伊掃部頭に致仕して候ふ」と、言ふ所大に當を得、衆大に怪しむ、一友答へて「余輩は皆彦根第一中學校生徒あり」といへば彼驚きて又曰はく「夫れ何かの御縁とは宜か／＼正